

# 平成21年度宮古群島病害虫発生予報第12号(3月予報)

## 3月の気象予報

向こう1か月の気温、降水量、日照時間の各階級の確率(%)

	気 温	降 水 量	日 照 時 間
高い(多い)	60	30	30
平 年 並	30	40	40
低い(少ない)	10	30	30

(平成22年2月19日付沖縄気象台発表・沖縄地方1か月予報)

## 平年値

	平均気温( )	最高気温( )	最低気温( )	降水量(mm)	日照時間(h)
宮古群島(宮古島)	19.7	22.5	17.4	132.2	109.1

(沖縄気象台発表・統計期間1971～2000・資料年数30年)

## 3月の発生予報および防除上の注意事項

### 1 さとうきび

収穫後圃場におけるカンシャコバナナガカメムシ(ガイダー)の防除対策

- a 収穫の際に地上に落下した卵や越冬成虫は地表や株元に残存し、収穫後の株から伸びた幼茎などで生育する。
- b 収穫後は速やかに耕耘(ロータリー、砕土)するか株出管理を行い、成虫の発生源となる古株を整理する。
- c 全面および畝間の耕耘は、卵の死亡率を高めることから、第1世代の発生を軽減する有効な手段である。
- d 気象予報によると、向こう1か月の平均気温は平年より高い確率が60%の見込みで、例年4月中旬が幼虫の防除適期であるが、本年は早まる可能性がある。

コガネムシ類幼虫(アオドウガネ・ケブカアカチャコガネ)の防除対策

- a 耕耘(ロータリ、砕土)によって、株元にいる幼虫の70～80%を殺傷できることから、収穫後は速やかに耕耘し、幼虫密度の低減を図る。
- b ケブカアカチャコガネ幼虫は、4月上旬頃には地中深く潜るため、耕耘による防除は両種が地表近くにいる3月までに行うことが効果的である。

### 2 マンゴー

開花結実期におけるハダニ類、チャノキイロアザミウマの防除対策

- a 2月中旬の調査の結果、ハダニ類の葉あたり成虫数は0.1頭(前年0.9頭)であった。
- b また、例年3～4月からチャノキイロアザミウマが増加し始める。混合花の新葉は本種の発生を助長するので、早い時期に摘除し早期防除を徹底する。
- c 気象予報によると、向こう1か月の平均気温は高い確率が60%の見込みであり、発生が助長されやすい。
- d チャノキイロアザミウマは薬剤抵抗性を発達させやすいので、同系統薬剤の連用を避ける。
- e 薬剤散布の際は、花粉媒介昆虫の活動に影響を及ぼさないように注意する。
- f 発生源となる施設内外の雑草を除去する。

### 3 とうがん(施設)

ミナミキイロアザミウマ・ハダニ類の防除対策

- a 2月中旬の調査の結果、ミナミキイロアザミウマの葉当たり成虫数は0.3頭(前月0.1頭未満)で、つる先当たりの成虫数は0.9頭(前月0.5頭)であった。
- b 2月中旬の調査の結果、ハダニ類の葉当たり成虫数は0.1頭(前月0頭)であった。また、巡回調査の結果、一部施設でナミハダニ(黄緑型)の発生が確認された。
- c 発生源となる不要な下葉や、圃場内外の雑草を除去する。
- d 多発すると防除が困難になるので、早期発見・早期防除に努める。
- e 薬剤抵抗性を発達させやすいので、同系統薬剤の連用を避ける。

### 4 にかうり(施設)

うどんこ病の防除対策

- a 2月中旬の調査の結果、うどんこ病の発病葉率は1.0%(前月6.8%)、発病度は0.3(前月1.7)であった。
- b 被害葉は除去し、生育に応じて古葉などを摘葉して、透光通風をよくする。
- c この時期は施設内の温湿度変化が激しくなることから、こまめに側窓開閉を行うなど、ハウス管理に特に留意する。
- d 多発すると防除が困難になるので、早期防除に努める。

ミナミキイロアザミウマの防除対策

- a 2月中旬の調査の結果、一部の圃場でミナミキイロアザミウマの発生が確認された。
- b 発生源となる圃場内外の雑草を除去する。
- c 多発すると防除が困難になるので、早期発見・早期防除に努める。
- d 薬剤抵抗性を発達させやすいので、同系統薬剤の連用を避ける。